



(こばやし ひろし)1927年生まれ95歳。北海道大学医学部卒。66年に北大医学部教授(癌研施設病理部門)、83年財団法人札幌がんセミナーを設立、その後内閣府所管の公益財団法人となり、現在相談役。90年日本癌学会会長。91年北大名誉教授。「がんの予防」(岩波新書・89年)など著書多数。

死とは生まれる前の自分に戻ること—— 専門医ががん医療の「生老病死」 語る

北海道大学名誉教授・元日本癌学会会長 小林博氏 (公益財団法人 札幌がんセミナー相談役)

医療は人の「生老病死」を扱う分野である。病気のなかでもとりわけ関心が高いのが、悪性腫瘍の「がん」。

そこで長年にわたりがんの研究に携わってきた、北大名誉教授で元日本癌学会会長の小林博氏(公益財団法人札幌がんセミナー相談役)に、がんという病からみた「老いること」や「死を意識しながら人間らしく生きる価値」について語ってもらった。

——まず小林先生の研究について教えてください。いろいろな研究をやり

ましたが、そのなかでも50数年前に行った「がん細胞の異物化」の研究が

「キュア」から「ケア」へ

——がん治療における医学の変遷については。

いまでは、がんは5年生存率でみると、60〜70%治る時代になりました。かつてがん細胞を1つ残らず徹底的に叩こうという試みが行われた時代がありました。いわゆる「トータル・キル・セラピー」という「がん細胞みな殺し作戦」の考え方が1990年代の後半まで有力

視されてきました。

ところが大切な正常細胞までも叩いてしまうことで、がんは小さくなつたけれど、身体が参ってしまつて亡くなるケースがよくありました。「がんを殺す」ことより、「生体を殺さない」ことが大切だという反省に基づいて、「キュア」から「ケア」への考え方が出てきました。

あります。「自分のものを自分でないものにすればよい」という単純な発想です。がん細胞は人間の身体から発生して発育していくわけですが、研究ではがんは異物と認識されるようなある種のウイルスを人工的に感染させます。そうしますと、主にリンパ球などの免疫によつてがんは治つてしまうのです。人間ではなく、ネズミを使った実験

もちろんがん細胞を完全に叩くのに越したことはないのですが、がんが残つても止むを得ない。むしろ生体ががんと共に生ずることで患者さんに大きな障害を与えることなく、長く生存を続けることができるのであれば、その方がもっと大事ではないか、という考えが次第に強くなりました。いまはがん細胞だけをピンポイントで攻撃する分子標的薬とか、ゲノム医療というものが発達してきて、ステージIVのがんでも、5年以上元気な方が増えてきました。ですからがんの5年生存率も、これからどんどん高くなっていくことでしよう。そのうち5年生存率ではなく、10年、20年の生存率でみななければならぬ時代が到来するかも知れません。

でした。

——がん免疫療法の先駆けになった研究ですね。

はい。当時としては、がんが免疫的に治る、ということを世界で初めて実証したことになりましたので、大いに注目されました。

——正常細胞と比較して、がん細胞の特徴は何ですか。

正常細胞は、試験管のなかで培養するとよく増

殖します。栄養を十分与える限り増殖を続けるのですが、そのうちに必ず増殖をやめてしまいます。「細胞が老化するからだ」と理解されています。

それに対して、がん細胞の方は永遠に増殖します。つまりがん細胞は、老化を忘れていつまでも若く増殖し続ける細胞なのです。なぜそうなるのか、その仕組みはよくわかっていません。

「死亡・罹患」年齢に着目

——医学の進歩は、がん治療に大きく貢献したのですか。

医学の進歩が、がんの治療成績の向上に大きく貢献したことは間違いありません。ですから、がん患者の生存率は高くなり、逆に死亡率は低下しています。でも考えようによつては、人間はがんがあつてもなくても、いずれはあの世に旅立つわけですから「生存率ゼロ、死亡率100%」と言えるわけですね。私は「率」だけでなく、「死亡年齢」とか、「罹患年齢」にも注目してよいのではないかと思います。

近年、死亡年齢も昔と比べてずいぶん延びてきました。同じがんでも昔は50歳で亡くなつていたのに、いまは60歳、70歳で亡くなつています。その主な理由は、がんの罹患年齢(発見年齢)そのものが延びたからです。その結果、死亡年齢が延びました。

——なぜ罹患年齢が延びたのですか。それは医学の進歩だけではありません。むしろ私たちのがんへの関心の高まりがあるでしょうし、私たちが住む社会や個人の生活環境が大きく改善されてきたからです。食生活で栄養のバランスがよくなつたり、衛生環境がよくなつたり、感染症が少なくなつたり、がんが予防できることなどがあげられます。目に見えないものの力が意外と大きいのです。



続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)